

天主閣

だより



マキキ聖城キリスト教会

「祈り」に思う その二

藤浪 義孝牧師

古代の中近東に住んでいた人たちは、セミ語族と呼ばれる民族語を話していました。その代表となる国語はアラム語でした。後の時代にギリシヤ語にとって代わり行政語となりましたが、一般庶民はアラム語を話しました。

ある日、ナザレのイエスが湖の近くの丘に登られるとイエスの教えを聞こうと、大勢の群衆が集まってきました。その時の教えは、山上の説教と呼ばれています。イエスは、教えの中で人々にアラム語で「祈り」について教えられたのです。古代アラム語で「祈り」の語源は、スラという言葉です。この言葉は「願う事を念じる」という意味ではなく、「捕らえる」という意味です。つまり、「神のみ意思を受けるために心と身体を備える（調整する）」という意味です。

「祈るとき、異邦人のように同じことばを、ただくり返してはいけません。彼らはことば数が多ければ聞かれると思っているのです。だから、彼らのまねをしてはいけません。あなたがたの父なる神は、あなたがたがお願いする先に、あなたがたに必要なものを知っておられるからです。」
(マタイの福音書六章七節―八節)

ナザレのイエスは、祈るときには同じ言葉を繰り返して祈るべきではないと教えられました。当時の人たちは、神は遠く離れたところにおられ、近寄れない存在であり、特別な人たちに仲介者に入ってもらわなければならない。自分達の祈りは聞いてもらえないと、宗教エリート族から教えられていました。また他の人たちは、自分達の神々は大きな声で何回も同じことを繰り返して願わなければ、聞いてくれないと思っていたのです。それでイエスは、「あなたがたの父は、あなたがたがお願ひする先に、あなたがたに必要なものを知っておられるからです。」と言われたのです。

イエスは「あなたの神」と言わず「あなたの父」と言われました。すなわち、神は近寄り難いお方ではなく、親しみやすく近づきやすいお方であり、私たちの親として私たちに深い関心を抱いてくださり、必要なものを知っておられると彼らの「常識」を覆されたのでした。子どもを愛する親は、子どものことをよく知っています。親は子どもの必要についても関心を持っています。天の父は、私たちの親以上に私たちのことをよく知っておられるので、無関心で居眠りしている神々を起すために同じ言葉を繰り返して祈る必要はないのです。

イエスは「だから、こう祈りなさい。『天にいます私たちの父よ。御名があがめられますように。御国が来ますように。みこころが天で行われるように地でも行われますように。私たちの日ごとの糧をきょうもお与えください。私たちの負いめをお赦しください。私たちも、私たちに負いめのある人たちを赦しました。私たちが試みに会わせないで、悪からお救いください。』」(九節―十三節)と人々に教えられました。

イエスが話されたアラム語でこの「祈り」を読むと、「天にいます」ではなく「私たちの父」(アブーン)がたいへん強調されていることに気づきます。イエスは「私たちの父よ」を強調されたのです。古代の中近東諸国では、「父」「母」は特別な敬意の表現でありました。特にアラム語の「父」(アバ)は親愛する人の呼称でありました。肉親意外に自分にとって最も身近な人、親しみのある人をアバと呼びました。現在もアラム語、ヘブライ語、アラビア語文化圏では同じ呼称で呼んでいます。ハワイではこれに似た呼称があります。アングル「おじさん」やアンテイ「おばさん」です。ハワイの住民は、この特別な敬愛の表現語をよく知っています。この呼称で呼ばれる側はとも相手に親しみを感ずるのでした。イエスは、私たちにとって最も大切で、最も身近に感じられるお方、あなたにとって愛情あふれる「アブーン」「私たちの敬愛する父」に祈りなさいと教えられました。

もう一つ気づく点は、イエスが「私たちの敬愛する父」と意図的に一人称複数形を使われたことです。「私たちの」とは、「特定の人たち」「特別に選ばれた人たち」に言及しているのではなく、全ての人に言及しているのです。昔も今も人々の間には目に見えない壁があります。「祈り」についての教えを最初に受けた群衆の間にも現在の人々の間にあるような壁がありました。しかし、「私たちの敬愛する父」は、「悪い人にも良い人にも太陽を昇らせ、正しい人にも正しくない人にも雨を降らせてくださる」(マタイ福音書六章)わたしたちの親として完璧なお方であられると教えられたのです。「私たちの敬愛する父」(アブーン)は、親しみやすく近づきやすく、私たちが全人類を深く愛し、大事にしてくださいとお方なのです。イエスは、祈りについて教える前にこのことをまず人々に教えられました。

(次号に続く)



マキキ聖城基督教会 七十五年史⑩
「教育会館」

永野牧師の残した大きな功績は、魅力的な福音説教によって信者を獲得したことと、キリスト教育館の建築がある、戦後サンデースクール出席者が増え、教室不足となったため、仮設した小屋、バス、木陰などを利用してクラスが開かれたがそれでも間に合わず三十室を増築することになった。先ず一九五六年建築計画委員会が組織され準備研究を行ったのち、一九五八年一月クリフオード・ヤング会社に設計を依頼し、同年末高橋建築会社が三十一万五千五百三十四ドルで落札、工事を請け負った。同社は既に一九三二年および一九三六年、聖城教会の建築を請け負ったことがある。一九五九年十一月月収入れ式が行われ、一九六〇年十一月二十日落成式が挙行された。教育会館建設基金の調達は、カービス・スミス会社に依頼して十五万ドルの募金運動を四ヶ月の期限付で行い、不足額はファースト・ナショナル銀行の融資をうけた。その返済祝賀晩餐会は、一九六八年十一月二十四日アラモアナ・バンケット・ホールで開催された。(続く)



今月の証

「とげ」実に大きな神様の愛の印
マキキ教会音楽宣教師 高瀬 真理

ハレルヤ 主のみ名を賛美いたします。

二〇二二年のハワイ宣教ミッションはマキキ・クリスチャン・チャーチの皆様がそれぞれの最善で愛労下さり祝福の内に終了いたしました。ここに心からの感謝を申し上げます。

さてこの度のテーマは「とげ」です。小さな「とげ」でも、とても苦痛を伴います。御言葉には、第二コリント十二章七節「そのために私は、高ぶることのないようにと、肉体に一つのとげを与えられました。それは私が高ぶることのないように、私を打つための、サタンの使いです。」とあります。

私は、バイオリンという楽器を見ると、絶好調であった自身の姿がよみがえり、楽器を見たくありませんでした。自分が演奏しているという高ぶりによって第一線での演奏活動が突然出来なくなるといふ事実絶望し、心の内に深い「傷・とげ」が突き刺さっていたからです。

イエスを救い主と信じ、長年歩んできましたが、この第二コリント十二章七節のみ言葉は、私にとってはずい最近まで、「このようであらなければならぬ」・「あるべき！」二度と高ぶることない自分自身を無理やり維持しようとする、しんどい御言葉であったのです。

時には家内にもう楽器を演奏することが出来ないこと、駄々をこねたこともありましたが。そこには、確かに救われた高瀬がいるのですが、絶好調中の高瀬を思い出し、そこから這い出ることが出来なくなっていた自分を握りしめた自分がいたのです。

そんな私を家内は背後では祈り、側にいて共に泣き、喜び、愛してくれました。DUOTAKASEは今にも止まってしまうような燃料の枯渇しそうな車のようでした、しかし確かに車は前に進んでいたのです。

なぜでしょうか？それは家内の信仰がイエス様の愛の中で無限の燃料を燃やし続けたからなのです。しかし、二〇一八年三月に高瀬が単身マキキ・クリスチャン・チャーチで礼拝奉仕をさせていたでいて最中に仰天する知らせが届きました。

家内が急性前骨髄球性白血病と診断されたという知らせでした。無我夢中で、闘病生活を開始しましたが、状況は悪いほうへ進んでいきました。そのような中ですが、家内の燃料は枯渇することなく、その波動は周りの人々へも伝わり、主治医をはじめとして、治療にあたられるチーム全員が家内の病室へは「ニコニコ」して対応されていました。見舞いに行く私が違和感を覚えるほどでした。それほど家内は事実を百パーセント受け入れ、主に百パーセントその事実を委ねていました。

ある日見舞いを終え、一日の感謝の祈りをささげているとき、主の導きがあり自分が「とげ」だと思っていることが実は「祝福」なのだ・・という気づきが与えられました。

整えてくださるのはイエス様であるという事でした。オーケストラでは演奏に入る前、必ず音を合わせます。チューニングをするのです。各々が勝手に音を合わせても、意味がありません。み言葉は・・「高ぶることのないようにと、肉体に一つのとげを与えられました。」自分でどうにかしなくてはならない・・この「とげ」とどのように戦うのか、どこか無理して、聖書がそのようにしなさいというので・・仕方なくそうします。そのような状況から、整えて(チューニング)くださるのはイエス様、その「とげ」さえも憐れんで、いくくしみ深く愛してくださいさる方。

家内の病を通して、すばらしい主の愛の目的を知ることとなったのです。こうあるべきクリスチャンから、解き放たれた元気なクリスチャンにシフトすることが出来たのです。

この度のハワイでの連合コンサートの中で、何度となく主に感謝の祈りをささげながら、実に大きな神様からの「愛」の証を、証させていたでいたのです。

家内は、三八〇日間寝たきりでした。失った演奏に必要な筋肉を生かされている間にリカバリーすることは人間的には不可能です。また、心配でろくに楽器を練習しなかつた高瀬も同様です。DUOTAKASEの身体的リハビリテーションの事も執り成し、お祈りいただければ感謝です。家内の病を通して、DUOTAKASEの燃料はいつも主の愛で満たされるようになりました。ハレルヤ！賛美はみ言葉を信じたものに与えられる「力」です。主がその音色を奏で、主がその音色を祝福されるのです。「とげ」があるから

こそ、その弱さを知り、主の実に大きな神様の愛の印を喜ぶことが出来るのです。高瀬個人的には、やっとな賛美奉仕者としての入り口に立たせていただけたという感謝の思いでいっぱいです。栄光はすべて主のもです。

今後の予定

☆ゲスト・スピーカー 三橋恵理恵哉牧師
九月四日(日) 午前十一時半

☆洗礼式 アラモアナビーチにて
九月十一日(日) 午前七時

☆ラウリマ・ミーティング
九月二十三日(金) 午後三時 黒田朔牧師

☆九月はフードランド 「Give Aloha」プログラム月間です。お買い物をしたときに、マキキ教会を指定してください。お買い物額の一部が教会に寄付されます。

編集後記

ハワイにも秋の気配が感じられる今日この頃。「秋深き、隣は何をする人ぞ」と、少し寂しい気持ちになってしまふのも、今年も多く愛する人を天に見送ったからです。でも嬉しい命の誕生や病からの復活も沢山ありました。「生と死」の時は、主の領域でしかないと、人間の小ささを身に染みる毎日、祈ることを忘れても主は「主の祈り」をすでに用意してくださっていることを知り心から感謝した今月号です。



マキキ聖城キリスト教会 宣教師部
編集 玉寄 朋子
レイアウト 大塩 真由